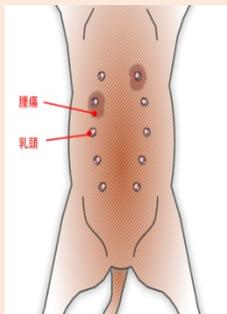




乳腺腫瘍のおはなし

近年、日本人の死亡原因で最も多いとされるガン。同じように犬や猫の死亡原因でもガンがトップ（4歳以上）になっています。今回は腫瘍のなかでも最も一般的によく見られる腫瘍「乳腺腫瘍」の話です。

犬と猫の乳腺



胸の前方から足の付け根辺りにかけて、左右4～5個ずつあります。（数には個体差あり）

乳首周辺の皮膚の下には、乳腺組織が網目のように広がっていて、片側の乳腺は上から下まで縦につながっています。この乳腺組織が腫瘍化したものが乳腺腫瘍です。

良性と悪性

乳腺腫瘍はメス犬に発生する腫瘍の約50%を占め、そのうち約半分が悪性といわれます。猫では、犬に比べると乳腺腫瘍の発生率は低いですが、発生した場合、80～90%以上が悪性と診断されます。



<良性腫瘍と悪性腫瘍の一般的な特徴>

	良性	悪性
転移	なし	あり
変化	あまり大きさが変わらない	急に大きくなる、出血、排膿
腫瘍死	なし	あり

治療

基本的には手術による切除となります。腫瘍が悪性の場合、放射線治療や抗がん剤などの薬剤を用いた化学療法が併用されます。また、手術不応や悪性度の高い炎症性乳がんの場合には放射線治療や化学療法のみを用いますが、完治は非常に難しく緩和治療がメインとなります。



部分切除	腫瘍の部分のみを切除 →残った乳腺に腫瘍再発の可能性あり
片側切除	腫瘍のある側の乳腺縦一列を全て切除
両側切除	左右の乳腺を全て切除

乳腺腫瘍が新たに発生する予防になる

※猫の場合はなるべく早期かつ、可能な限り広範囲の切除が望ましい

予防

女性ホルモンが関与する病気のため、初回発情の前に避妊手術をすることでかなりの率で予防することができます。



<避妊手術後の乳腺腫瘍発生率>

犬		猫	
実施時期	発生率	実施時期	発生率
初回発情前	0.05%	6ヶ月未満	9%
2回目の発情前	8%	7～12ヶ月	14%
3回目の発情前	26%	13～24ヶ月	89%

⇒2歳以上の実施では予防効果はないとされている

スタッフより スタッフより

腫瘍を早期に見れば、その分ワンちゃんネコちゃんの負担は軽くなります。日頃から気にしてあげましょう。またネコちゃんの場合は、体重が2割以上減ると体の異常のサイン。早めの受診をおすすめします。